

おめでとう！

「松本山雅」

J23年目にして悲願のJ1昇格

松本山雅FC 悲願のJ1昇格

松本山雅創設時メンバー

高18回 佐野 耕一



昨年十一月一日、晩秋の雨の九州の地で、山雅FCがアビスパ福岡戦に鮮やかな勝利を納め、夢の舞台J1昇格を決めた瞬間、このチームのスタート時から関わっていた者として、こみ上げる大きな感動を覚えた。

恒例の県陵同窓会賀詞交歓会で、私と「純喫茶山雅」の関係や山雅FC誕生のきっかけを知る多くの先輩・友人から、「チーム発足五十年が経過しているので、誕生のいきさつ等を整理しておく必要がある。」との強い要望があった。

県陵サッカー部が母体となつて発足したチームが、新聞・テレビ等で他校の「純喫茶山雅」常連客が立ち上げたという紹介に私も違和感を覚えていたこともあり、この際、私がサッカーに出会い、山雅SCを立ち上げた当時期的を絞り整理してみた。

私のサッカー人生の源は県陵サッカー部で、故渡辺三郎監督に出会いサッカーの楽しさ、奥深さを学んだ。全てはここがスタートと言える。当時、サッカーはマイナーで部員も少なく、マスコミの注目度も少なかったことを思い出す。その後、山雅SC(当時の名称)の立ち上げから長野県社会人サッカー選手権大会優勝までの三年間と、松本山雅FCのJFL昇格までの三年間の計六年間山雅に関わってきた。サッカー後進県と言われた長野県にサッカー人口を増やし、底辺を広げたいという強い思いで山雅SCを立ち上げ、また、松本山雅FCでは裏方として理事を務めてきた。

そんな経過を時系列に整理すると次のようになるが、発足時では見解が分かれる。松本山雅のホームページには1965

(S40)年となっているが、昭和44年9月25日の信濃毎日新聞朝刊では昭和43年発足としてある。

◇1967(S42) 私が大学2年の時、帰郷時に県陵同期の伊藤君(サッカー未経験者)から松本駅前の「純喫茶山雅」常連客で作ったサッカー同好会の指導の話があり、誘われたのが最初のキッカケであった。参加してみると、サッカー経験者は一人だけ、また、メンバーも女性を含めて十数名。当然試合ができる状況ではなく、サッカー同好会としての活動もあまりされていないようであった。その後、私の自宅が「純喫茶山雅」の近所であったことから帰郷時に私は毎日のように訪れ、店主の山下さんとサッカー談義をした。

このなかで本格的なチームを作ろうということになり、正式に山雅SCのチーム作りの依頼があり、着手した。

◇1968(S43) 私がまず最初にやったことは、サッカー経験者を集めること(S43卒業県陵サッカー部OB西沢、芦田、花

村、坂巻の4名が加入し、他校から数名加入)でようやく試合ができる状況になった。県陵サッカー部OBは私を含めて5名となり、県陵サッカー部OBを主力としたチームが出来上がった。ユニフォームは県陵と同じ立縞模様のものを作成、対外試合に臨めるようになった。私の思いとして、この時が実質山雅SCがスタートという思いを持つ。

当時長野県には本場の意味でのサッカークラブは無く、(高校等のOBクラブチームはあったが...)山雅SCを県下初のクラブチームとして発展させ、長野県トップの社会人チームを目指すこととした。そのために、長野県で常にトップであった県陵サッカー部出身者を重点に他校の県選抜選手、有力選手も誘い、クラブとしての特色を生かしたチーム作りを目指した。私自身も県選抜、北陸選抜に選ばれ、他校の選手と一緒に戦う面白さを味わった経験から、クラブチームとして窓口を広くすることに。サッカー経験者(県

陵サッカー部出身・県選抜OB)の加入も可とし、皆でサッカーの面白さを楽しむBチームに分けて、この趣旨に基づいたクラブ会則も作り、本格的な活動がスタートした。

◇1969(S44) S44卒業県陵サッカー部OBの上床、続いて澤渡が加入。また、他校の県選抜OBも数名加入し、山雅SCの本格的なデビューとなった。しかしながら練習場確保も思うようにならず、県陵サッカー部の渡辺三郎監督にお願いし、グランドや、また、ボールも借用し、練習を続けた。



社会人サッカー県予選優勝(松本市サッカー場にて) 2列目 左から3人目が筆者